

金印

プロフィール

時代：57年(弥生時代)日本へ。1784年(江戸時代)発見

場所：中国より日本へ贈られる。福岡県志賀島で発見

人物：後漢の光武帝が、奴国王へ贈る。百姓甚兵衛が発見

サイズ：一辺平均 2.35cm⇒実物大

Q:金印は、歴史書にどう記述されていますか？ 『後漢書』東夷伝には、

「建武中元二年、倭奴国、奉貢朝賀。使人自称大夫。倭国之極南界也。光武賜以印綬。」

(建武中元2〈西暦57〉年、倭の奴国、貢を奉じて朝賀す。使人自ら大夫と称す。倭国の極南界なり。光武、賜ふに印綬を以てす。)

という記述があり、金印の発見がこの文章を裏付けるとされている。

Q:金印は、どのように発見されたのですか？ 金印は、江戸時代に土の中より掘り出された。1784年2月23日、百姓甚兵衛が筑前国那珂郡志賀島の水田の修理中に、大石の下から発見した。甚兵衛は口上書とともに福岡藩に金印を献上し、これ以後黒田家に伝わった。現在は、福岡市博物館が所蔵している。1954年に、国宝に指定された。

Q:金印は、本物なのですか？ この金印が本物であるかについては、発見と同時代に福岡藩の学者亀井南冥が『後漢書』東夷伝の記事に注目して実物と鑑定した「金印説」の後、さまざまな疑問が出された。江戸後期には、松浦道輔が印文や彫り方について指摘した「偽作説」を説き、村瀬之熙は金印の蛇紐(へび形のつまみ部分)についての疑問を出した。その後、1950年代に中国雲南省石寨山遺跡から蛇紐の「滇王之印」という金印が出土したこと、金印の一辺が後漢時代の一寸と一致していることから、現在では本物と考えられている。

Q:金印のサイズは、どれくらいですか？

一辺	平均 2.35cm
総高	2.24cm
印台高	0.89cm
重さ	*108.7g

*100円玉 約23個分、500円玉 約15個分。

Q:金印は、どのように用いられたのですか？ 印面には、隸書体で「漢／委奴／国王」と、三行五文字の印文が彫られている。当時の印章は、現在のようにインクをつけて紙に押すという用い方をしない。当時は、文書に封をする時、境目に粘土を塗り、そこに印をおして文字を残した。このため、文字は陰刻で彫られている(文字の部分がくぼんでいる)。

Q:金印のつまみの部分は何を示していますか？ 印台の上にはへび形のつまみ(蛇紐)がついており、その身体に鱗が刻まれている。つまみの種類は、身分で細かく分類されていた。へび形は「滇王之印」の例から、南方の湿潤地帯の王に与えられたものと考えられる。つまみには綬(ひも)を通し腰にぶらさげて携帯した。綬も身分により色が異なる。